

[成果情報名] 雨よけピーマン類におけるキイカブリダニの利用技術

[要約] オオムギとクサキイロアザミウマを組み合わせたキイカブリダニのバンカーを設置し、他害虫の防除に選択性殺虫剤を用いることで、雨よけピーマン類のアザミウマ類、コナジラミ類の発生およびアザミウマ類による被害を薬剤防除と同等以下に抑えることが可能である。

[キーワード] 雨よけピーマン類、キイカブリダニ、バンカー植物、アザミウマ類

[研究所名] 高知農技セ・生産環境課・昆虫担当

[代表連絡先] 電話 088-863-4915

[区分] 近畿中国四国農業・生産環境（病虫害）

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

中山間地域の基幹品目であるパプリカ、赤ピーマンなど雨よけピーマン類の栽培では環境保全型農業への積極的な取り組みが進められている。しかし、天敵等を活用した総合的害虫管理技術については、これまで試験研究での取り組みがなされておらず、アザミウマ類、コナジラミ類などの発生が依然として問題となるなど技術確立には至っていない。

そこで、雨よけピーマン類の栽培において在来捕食性天敵キイカブリダニを利用した総合的な害虫管理技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. バンカーとして、4月下旬にハウスサイド部または谷部に、1カ所あたりオオムギ 20ml を 2 m の長さに条蒔きし、5月下旬および6月上旬に天敵の餌であるクサキイロアザミウマ（100 頭/バンカー/回）、6月下旬にキイカブリダニ（20 頭/バンカー）を放飼すると、キイカブリダニは放飼後約1ヵ月で100倍程度に増殖する。オオムギバンカー上でキイカブリダニの密度が最も高まる7月中旬からオオムギが出穂、枯死し始めることから、キイカブリダニは作物へ移動する（図1）。
2. キイカブリダニは作物へ移動しはじめてからおおむね3週間で約8m移動、分散するため、オオムギバンカーの設置数は10~15カ所/10aが適当である（データ省略）。
3. オオムギバンカーを設置し、他害虫の防除に選択性殺虫剤を用いることで、アザミウマ類、コナジラミ類の発生およびアザミウマ類による被害を薬剤防除と同等以下に抑えることが可能である（図2、データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. キイカブリダニは生物農薬として現在農薬登録申請準備中である。
2. キイカブリダニ放飼前にアザミウマ類の発生が見られる場合は、タイリクヒメハナカメムシとの併用が必要である。

[具体的データ]

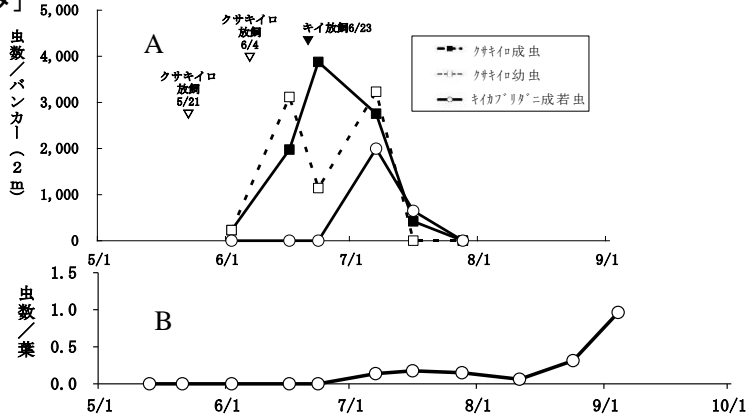


図1 オオムギバンカーにおけるクサキイロアザミウマ、キイカブリダニ (A) およびパプリカにおけるキイカブリダニ (B) の密度推移(2009)

注 1)オオムギは種日：2009年4月28日
2)放飼頭数 クサキイロ；100頭/バンカー/回、
キイカブリダニ；20頭/バンカー

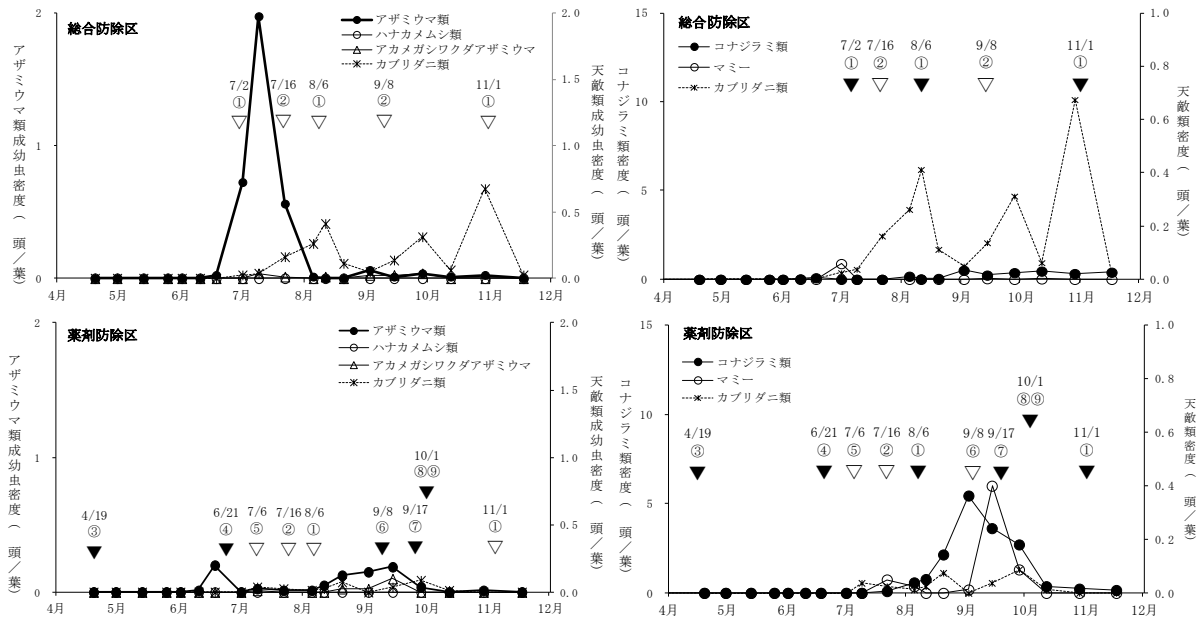


図2 各区におけるアザミウマ類、コナジラミ類および天敵類の発生推移(2010)

注1) 総合防除区では、バンカーとして、4月19日にオオムギをは種し、5月13日、25日にクサキイロアザミウマ (100頭/バンカー・回)、6月18日にキイカブリダニ (20頭/バンカー) を放飼した。
2) ▼はアザミウマ類またはコナジラミ類に、▽はその他の害虫に対する殺虫剤の散布を示す。
①：ピメトロジン水和剤、②：ゼンターリ顆粒水和剤、③：チアメトキサム粒剤、④：イミダクロプリド水和剤、
⑤：フェンピロキシメート水和剤、⑥：ピリダリル水和剤、⑦：ジノテフラン水溶剤、⑧：ピリダベン水和剤、
⑨：アセタミプリド水溶剤
3) 耕種概要：(1)パプリカ；「スペシャル」 (2)定植日；2010年4月19日 (3)栽植密度；うね間180cm、株間60cm
4)カブリダニ類には中気門ダニ類を含むが、主要種はキイカブリダニであった。

(下元満喜)

[その他]

研究課題名：中山間地帯における雨よけピーマン類の土着天敵を活用した総合的害虫管理技術の開発

予算区分：県単・実用技術開発事業

研究期間：2007～2010年度

研究担当者：古味一洋、広瀬拓也